

氏 名	矢部 俊太郎
授 与 し た 学 位	博 士
専 攻 分 野 の 名 称	医 学
学 位 授 与 番 号	博甲第 5675 号
学 位 授 与 の 日 付	平成30年3月23日
学 位 授 与 の 要 件	医歯薬学総合研究科 病態制御科学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学 位 論 文 題 目	Predictive factors for outcomes of patients undergoing endoscopic therapy for bile leak after hepatobiliary surgery (術後胆汁漏に対する内視鏡治療の有用性の検討)
論 文 審 査 委 員	教授 藤原俊義 教授 八木孝仁 准教授 渡邊豊彦

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

肝切除・肝移植後の胆汁漏は術後の重篤な合併症の一つである。今回、術後胆汁漏に対する内視鏡治療の有用性、治療成功因子、長期成績を後方視的に検討した。2004年7月から2014年6月の期間に術後胆汁漏に対して内視鏡治療を施行した58例を対象とし、Technical success を目的胆管へのステント留置、Clinical success を胆汁漏に伴う臨床所見の改善、Eventual success を胆管造影での造影剤漏出の消失と定義した。更に胆汁漏の重症度を胆管外への造影剤漏出の程度により軽症群、重症群の2群に分類した。治療成績は Technical success rate 90%、Clinical success rate 79%、Eventual success rate 71%であった。治療成功因子の検討では、胆汁漏の重症度のみ有意に Eventual success rate に影響を及ぼす因子であり、重症群ではEventual success rate が低い傾向がみられた。しかし、治療過程ごとに検討したところ、重症群では有意に Technical success rate が低いが、一旦 Technical success が得られれば、その後の治療過程では軽症群と同等の治療効果が得られていた。内視鏡治療は術後胆汁漏に対する有用な治療法であり、内視鏡技術の向上や処置具の進歩により更なる治療成績の向上が期待される。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本研究は、肝切除・肝移植後の胆汁漏に対する内視鏡治療の有用性、治療成功因子、長期成績について、後方視的に検討した臨床研究である。

術後胆汁漏に対して内視鏡治療を施行した58例を対象に、その程度を胆管外への造影剤の漏出程度で軽症群、重症群に分け、目的胆管へのステント留置を Technical success、臨床所見の改善を Clinical success、造影剤漏出の消失を Eventual success として検討した。その結果、重症群では有意に Technical success rate が低いが、一旦 Technical success が得られれば、その後の治療過程では軽症群と同等の治療効果が得られることが明らかとなった。

本研究は、Technical success rate を向上させる要件の同定は困難であったが、術後胆汁漏に対する内視鏡治療の有用性について重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。